敗戦の年

初谷　信（習志野台・55歳）

一九四五年（昭和二十年）この頃、私は、東京都世田谷区赤堤町一丁目二十番地に祖父母、父母、二人の叔父、妹と私の八人家族で住んでいた。敷地は百数十坪程あったが借地で家は昭和の初めに祖父が建てたものだった。

周囲の家々もこの近辺は大体がこれ位の広さのものだったように思う。宅地の周辺には森や畑が散在し、六所神社とか不動神社なども近くにあり、とても長閑かで静かな郊外地だった。場所は小田急線の豪徳寺、玉電（今の新玉川線）の山下町と六所神社、帝都電鉄（今の井ノ頭線）の東松原などの駅が比較的近かった。

昭和二十年の四月からは学校が閉鎖になり、私は国民学校の四年になったものの、教科書だけは貰い自宅学習になってしまった。近所や周辺の友達も殆ど疎開していなくなり、子供は私ともう一人、三つ位下の男の子だけになってしまった。外へ遊びに出ても誰もいないし仕方なくその子と家で遊ぶことが多くなっていた。

だが、私も五月末か六月初めに集団疎開に行く予定になっていた。衣類から持物、細かい道具、鉛筆の一本一本にまで名前が付けられた。私がとても嫌だったのは、その頃ではもう買えなくなった、楕円形の白っぽい台に花模様のたった一つの下駄の表に、祖父が焼印で名前を押したのだった。私はこんなにまでしなくてもと反抗したのだったが、父も祖父もこれくらいにしとかなければすぐ盗まれてしまうからとなるべく目立つように名前を付けた。

これらは、柳行李に詰められ、行李にもどこから見ても分かるほど大きな字が墨で書かれた。

この行李は他の幾つかの行李と共に防空壕に入れられた。防空壕は、初め縦穴式で板をのせ上から土を被せたものだったが、こんなのでは焼夷弾が突き抜けてしまうからとその穴の横を掘り更に一段と深く大きなものに作り変えた。そのお陰でこの中に避難させた荷物は全部助かった。とはいっても八人家族にすれば僅かなものに過ぎなかった。

私が最も惨めな思いをしたのは食事だった。主食の配給がどんどん少なくなっていった。米にいろんなものが混じって炊かれるようになった。芋、大根、大豆、大豆粕、勿論麦なら最高だった。次第に量も限られた飯は丼一杯となった。ある時から母は秤を使い出した。舅、姑、小舅たちの中で如何に平等に分配するかから出た、母の苦肉の策だった。

だが当時の私には、この事は家族の中でここまでしなくてはいけないのかと情けなく、人間としての誇りを失うような恥ずかしささえ感じられた。祖母も同じ思いだったのか、「こんなことは誰にもいっちゃあいけんよ」

とおしゃべりだった私に注意をした。そんなことを言われるまでもなくそれから何十年もその話は誰にも出来なかった。

思い出の中に私自身の失敗がある。五月二十二日の夜だった。警戒警報の後空襲警報が発令された。それまで一度も危険を感じたことが無かったので、みんながもうここには敵機が来ないものだと高を括っていた。周辺には工場など全くなく田園風景の広がる住宅地であったこともある。

その日もいつものように私達家族はそれぞれ呑気に芝生に立ったり、縁側に腰掛けたりして夜空を眺めていた。私はふと北東の空を見上げた。音がしたのかどうかは忘れたが、空いっぱいに花火?とっさにそれは焼夷弾だと分かった。それは私の方に向かって落ちてくるように感じた。それは空全体の星が落ちてくるようにも思えた。

突然私は門を飛び出した。隣家の前を駆け抜けその先の畑を左に回り、とにかく北東とは反対の方向へ逃げなければとそれだけを頭にただ夢中で走りに走った。家からはかなり離れた友達の家の前も駆け抜けた。振り返ったが空はやはり私を追い掛けてくる。

私はその恐怖から逃れるというただその一念だけでひたすら走り続けた。広いコークスの道に出た。すぐ先が六所神社だった。

燈火管制の敷かれた暗闇の中、私には目の前の続く道しか見えなかった。家族のことなど考えもしなかった。気が付いた時は六所神社の先の踏み切りを渡り、当時の赤堤町二丁目まで来ていた。周りには家はなく雑木や雑草の生い茂る小高い丘を切り開いて造られた赤土の剝き出した道に立っていた。

丁度その時私に声を掛けた人がいた。それは大場さんという私の家よりもっと北東にあたる場所に住んでいた家族の人達だった。小学生がたった一人でそんな淋しい所にいたので声を掛けてくれたのだった。北東の方向で燃えているらしいのを心配しながら明け方になって一緒に連れて帰ってもらった。

うちでは私が突然いなくなったことで大騒ぎだった。自分だけ助かって何になる、もし家族が焼け死んで一人ぼっちになってしまったらどうする、自分だけ助かればよいなどというのは利己主義というのだ、などとみんなに散々叱られた。

結局、その日の空襲では松原周辺がやられたのだった。それは確かにうちからは北東に当たっていたが、大場さんの家も助かったのだった。

恐怖が現実になったのは、一日置いた五月二十四日の夜のことだった。例のごとく私達は防空壕に入らず、祖母は茶の間と廊下を仕切る障子に凭れ、母は妹をおぶい、寝んねこ姿で茶の間に座り私と叔父は靴を履いて縁側に腰掛けていた。下の叔父は学徒動員で中島飛行機（株）の大宮工場の夜勤に当たっており家にはいなかった。祖父と父は家の中にいた。B29がかなり上空を飛んでいることを除けばとても静かな夜だった。

突然、ヒュルヒュルあるいはシュルシュルというような異様な音の一瞬の後、雷が周りに何カ所も落ちたような凄まじい音と響きが私達を襲った。それは何もかもが破壊されたと思うほどだった。

私は思わず反射的に両手で耳を塞ぎ前の芝生に前屈みに伏せた。横では叔父も同じ恰好で伏せていた。音が止み私は顔を上げ振り返ると、私と祖母の丁度真ん中辺り、廊下に焼夷弾が突き刺さって火を吹き上げていた。

母は座っていた座布団を両手で持ちその火に向かって何度も何度も叩き付けた。それは何の効果もなかった。

その時祖父がそんなことをしないで、女子供は早く逃げなさいと叫んだ。

ふと台所をみると真っ赤に燃え上がっていた。

私は二日前の苦い経験から、祖母と母の手をしっかり握った。私が逃げたと同じ道を今度は落ち着いて逃げた。だが気が付くと母は足袋裸足だった。コークスの道に来ると、二日前私が走った時とは違いもう既に避難してきた人々が、あちこちに固まって、燃え上がる方向を見つめていた。

この近辺に落とされたのは油脂焼夷弾というもので六角筒で差渡しが八、九センチ、長さが五十センチほどで、下の叔父に聞いた話では三十六個が一固りで爆弾のような母体で後尾に七、八十センチの羽が四枚固定されているのだそうだ。これがB29から落とされると、ある一定の上空で分散され落ちてくる。その一つ一つが着下すると同時に蓋が開き燃え上がる。

我家の宅地だけで七個も落ちた。庭にもあちこち落ちたので上の叔父の記憶によれば燃え上がる時に幅三、四センチ長さ十五～二十センチの油の布を同時に吹き上げ、勿論燃えている布なのでこれがひらひら落ちてきて庭全体に火の花が咲いたようで、とても恐ろしかったと言っていた。また私の父は消火のために裏でポンプを押している時、この燃えている油の布が父の両手の甲にぺたっとへばり付き火傷を負った。

焼夷弾については飛行機に詳しい下の叔父が焼け跡を調べまた隣家の庭に焼夷弾の後尾の羽の部分が落ちていたことから分かったのだった。家の庭の芝生に突き刺さっていた焼夷弾は、地下一メートルの深さにまで食い込んでいたそうだ。

祖父達男共の消火活動の努力も空しく、すっかり焼け落ちるのを見届けてから私達の避難場所へやってきて、家族はそこで夜明けを迎えた。

帰る家を失った私達は仕方なく、家から歩いて七、八分離れた祖父の兄の家へ行くことになった。少しの違いでその辺りは焼け残った。そこまで歩く道路のあちこちに焼夷弾が突き刺さったまま、五センチ十センチと不気味に頭を覗かせていた。それがもし不発で何時火を吹き出さないかとか、まだ奥の方に火が残ってうっかり踏んで火傷などしやしないかと恐る恐る歩かなければならなかった。

祖父の兄の家は七人家族で決して小さな家ではなかったが、私達八人が一緒に住むには無理があった。叔父達二人と父はそれぞれの会社の寮に入れて貰い、残りの五人も一週間余り世話になった後、兵庫県明石市の知人の家へ突然転がり込むことになった。

その知人と云うのは、父の都合で私の両親と私の三人で明石に住んでいた隣人だというだけの関係だった。私が二才の頃から小学校（当時国民学校）へ入るまでの四年間の付き合いに過ぎなかった。

それにも拘らずその知人、吹田（ふきた）家では私達五人を大変快く受け入れてくれ、八畳の部屋を貸してくれることになった。今考えればずいぶん図図しい話だが、戦時中だったからこそなのだ。

六月になりB29は明石まで襲った。明石に焼夷弾が落とされたのは何時かは忘れたがこの時は低空飛行で、防空壕に入っていてもその恐ろしさは東京で遭遇したより以上のものだった。すぐ近くまで焼けたが幸いこの近所は助かった。翌日、見に行ったところ明石駅周辺はすっかり焼け野原と化していた。

この家で敗戦を迎えた私達一家は一年余りも世話になり、その後も、吹田氏が町工場を経営していたこともあり、その倉庫の一部を改築して家を建て、貸してくれたのだった。

結局、その家には父や下の叔父も来て、十年以上も住み着いた。

私達が無事に生き延びたのも吹田家のお陰だと今でも感謝している。